

平成十六年九月一日発行 第十四巻第九号 通巻第一五九号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成16年9月号



# 曼荼羅

高橋将夫

これほどのはんざきにしてこのまなこ  
炎天を来たりし母の寢息かな  
触れあふも蓮の浮き葉の重ならず  
考へる前に玉巻く芭蕉かな

『俳句』(八月号)七句

白山を見てゐるだけの帰省かな  
蟬穴のあまたに星の明かりかな  
神々の真夏の夜のはかりごと  
一切を承知の白地はおりたる  
永劫の眠りより覚め蓮の花  
曼荼羅や天道をゆくかたつむり  
涼しさの宇宙にありし穴と泡



特別作品

麻暖簾 壱の倉へと通さるる  
仏前に 祝儀袋や百合の夜  
白薔薇のブーケや神父の鼻うごく  
榆並木 抜け出て虹の方へゆく  
留め椀に 蓴菜浮いてをりしかな  
十三重塔や青嵐おさまりし  
入鹿の絵 青葉の部屋にありしかな  
犬連れて 門に立ちをり白緋  
天神の 夜市の金魚貫ひたる  
長居して さびたの花に暇乞ふ

# 槐安集

市場基巳

風うけて歩ゆむや雲雀上がるまで  
晴ることばかり考へ十一は  
黒蟻の真昼は山の迫り来る  
大杉に流れし月日涼しけれ  
守口の省二の汗を嗅ぎに来し

水野恒彦

かはたれのうすきひかりの蟻地獄  
日も月も虚空に烏揚羽かな  
流されて赤い手毬と海月かな  
天牛の音もて離るわたつうみ  
高野聖かつ飛び灰の匂ひする



石脇みはる

会者定離槐の花のあふるるよ  
青葉闇より声明の起こりたる  
六月のあかむらさきの海牛  
嬰粟坊主茎の曲りを如何せむ  
梅雨茸青い光を放ちけり

竹内悦子

赤茄子や二階に泊る客二人  
人とゐてうれしき日なり凌霄花  
淡竹茹で机の上の十牛図  
いきなりの雨天上にねぶの花  
夏潮や修正液はいりませぬ

木下野生

引き潮のはじまつてをり夏燕  
県庁の正門のまへ夏落葉  
袋掛うちの一人は少女なり  
草の葉となりて草矢が水の上  
夏の雲海は広いな大きいな

延広禎一

宝鐸の揺るる薄暮や鯛の海  
夏の炉や馬刺一皿置かれある  
竹夫人を陰干ししをる寫樂かな  
鰻<sup>うな</sup>井<sup>どん</sup>を食しをる闇のろくろ首  
深窓の乳房大山蓮華かな

中島陽華

布引の香草届く星まつり  
内股や梅雨入の足となつてをり  
のどくろをしつかり煮付け南風  
飴屋の休日青々と額の花  
まいまいの千回廻り天馬かな

栗栖恵通子

短夜の大言海を閉じにける  
泥海のをさを寄りをり蛭子神  
片<sup>ち</sup>辺<sup>ち</sup>に考<sup>ち</sup>の来てをる夕端居  
ダリと眼の合うてしまひし蝮谷  
モンローの切手舐めをる白夜かな

加藤みき

暮方の烟の匂ひ枇杷熟るる  
十葉の花叢鳥天狗かな  
余り苗色濃く育ちぬたりける  
鳶を誘ふポセイドン枇杷の空  
ががんぼの体当りするイコンかな

大島翠木

羅の男神へと消えゆけり  
置かれたる仏頭の廊徽くさし  
まないたの夏大根のふくらはぎ  
穴だらけの石垣なりし蛇の衣  
嘘言うて緋鯉の動き見てゐたり

雨村敏子

梅の種を吸うてをりけり葉月潮  
額の高さに石斛の花の影  
ぽつかりと空に穴あり夏蜜柑  
蛇の衣蹠濡れてゐたりける  
アマリリスらりらりら芋けんぴ



# 槐市集

近藤紀子

今年竹に両手触るるや門口へ  
劍豪の名の駅青葉繁りをる  
はつ夏の砂丘の砂を踏んでをる  
甚平をひとりで着しとメールかな  
南高梅そおるとざるにうつしたる

近藤喜子

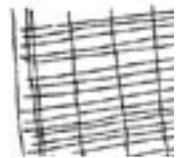
ごつごつとぜんまい仕掛け羽抜鶏  
風鈴吊る空の最も明るき辺  
小面の遠き眼差し業平忌  
ぼんやりとをり花莫産の藍ふかく  
かわほりの紫よぎる弾薬庫

近藤公子

夕蟬や江戸切子にて銘酒なる  
三光鳥雨の止み間のありにけり  
ありたけのよろこび見えて四葩かな  
酔とにがり入れて炊く飯梅雨晴間  
日盛や茶箱のふたの斜めなる

柴田靖子

深山路に日矢さしてをり心太  
紫陽花やそれぞれに皆今日の色  
夾竹桃の色遠ざけし臥せし今  
かにかくにやすらぎありし花蜜柑  
深山路の風強かりき蛇の衣



# 槐集

## 高橋将夫選

夏掛や闇の発光ダイオード 枚方

中野 京子

万緑の森新深の朝かな

青天をいたたく湖の蓮浮葉 枚方

谷村 幸子

朝厨刃さきに白き梅雨の蝶

仏壇に棕櫚刷毛つかふ朝ぐもり

文字摺のこの世へ父母に呼ばれけり

川音や湯の中にゐて螢追ふ

藤椅子に記憶の飛沫オルゴール

菩提樹の花満開や鈴を買ふ

泥眼の奥底しれぬ五月闇 岡崎

近藤 喜子

青柿や茅の鐘楼あたりまで

本多 俊子

刃紋(じんもん)の青く波立つはたた神

赤茄子の水に沈みてしまひけり 岡崎

隣り合ふ玄室の闇蟻の国

蟻走る金星蝕に間に合ふか

人臭き子子の水浚ひけり

大日や大気まさぐる海胆の棘

浮いて来い夜半は蛹となる眠り

稲荷道盃の中に鯰をり

平らかに昼の海あり凌霄花 枚方

谷口佳世子

赤鱗のしなふ力や半夏生 摂津

中田 禎子

炎帝に池の底なる白き鯉

カオスより神の手朱夏の画廊かな 蒲川公常展

金星や守宮の腹の動きをる

めまとひを思ひ切り吹く悟空かな

後の世は金魚とともにねむりたし

湖の晴れ梵字の上のなめくぢり

天と地の間に吊す螢籠

羅や碧き闇間に目の光る

白昼やメビウスの輪に大蚯蚓

# 銀河往来 高橋将夫

Ⅱ 「槐」全国大会を前に Ⅱ

◇第十三回「槐」全国大会が近づいてきた。開催地は「槐」創刊一周年記念大会開催の地、近江である。その時の「大会記」の一節を紹介する。「正午、会場の滋賀厚生年金休暇センターに着く。玄関で主宰に逢った。長命寺まで車で行って帰つて来たところだった。食後、会議に少し間があるから西の湖めぐりに参加する。二、三雨を点じたかと思えば急に陽がさして暑い。粗末な小さな舟であつた。舟は溝川をそろそろすべつて、やがて竿から櫓に替わると一面、芦原が展げてくる。行々子が驚き、

鳩がもぐる。同行には関東の人が多かつたが「霞ヶ浦よりも変化があつてよろしい」とのことであつた。鳩の浮巢をはじめて見た。前にある山は安土城址と云う。深々と木の茂る山だ。今年竹がなびく。今にも戦国武者がおめき叫んで突撃してくるかもしれない。ここは信長が哄笑し、秀吉が疾駆した近江の国である。「槐」H4年10月号、記・小林喜一郎」。風情があつて、とてもいい所のようにだ。ふるつて参加されたい。

◇この世には光があつて闇がある。陽があつて陰がある。それぞれが真実ではあるが、〈存在〉ではない。宇宙にはそれら全てを包摂した〈存在〉があるという。俳句もまた一つの小宇宙。伝統と前衛、写生と抒情、客観と主観：それらは、それぞれ一面の真理であるうが、〈存在〉（根本）ではなからう。俳句の根本もまた、それらが一如となつたところにあるのではないだらうか。例えば、光の三原色が集まつて白色となるように。

生と死のあはひに入りし襖かな  
何かにつけて、つい俳句との係わりで考えてしまふ。  
将夫

『俳句朝日』（7月号）より

◇「槐集」観照

夏掛や闇の発光ダイオード 中野 京子

夏の掛布団のやわらかな感触からか、発光ダイオードの光が蛍の光より自然で美しく見えてくる。

刃紋の青く波立つはたた神 近藤 喜子

名刀正宗の刃紋か、妖刀村正の刃紋か。青く波立つ刃紋が雷神を呼ぶ光景が浮かび上がる。

炎帝に池の底なる白き鯉 谷口佳世子

炎天下の池の底でじっと動かぬ白鯉。池の底でけなげにも炎帝と対峙している白鯉は、妖しくさえ見えてくる。

川音や湯の中にひて螢追ふ 谷村 幸子

湯につかっていたら螢がきた。我を忘れて螢を追っている姿がなんとも愉快ではないか。「川音や」はさりげなくてよい。

大日や大気まさぐる海胆の棘 本多 俊子

陸に上がった海胆が、まるで大気をまさぐっているかのよう棘を動かしている。海胆を見つめる大日のまなざしがある。

(以下略)